

ジャワ農村における村長選挙とネットワーク

ふくしままさひと
福島真人

はじめに

- I 調査の背景
- II 村長選挙の政治過程
- III ネットワークの基本戦術
- IV 各候補者の支持基盤
- V 考察と結語——派閥形成の諸要因——

はじめに

文化人類学者クリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) の、有名なジャワ宗教研究^(注1)以来、ジャワの文化体系はその宗教的傾向によって幾つかの下位システムに分割され、それらと政治的諸潮流との密接な関係がしばしば議論の対象になってきた^(注2)。東ジャワにおけるモジョクト (Modjokuto) 調査計画による一連の作品はこうした観点を明確に打ち出しているが、その代表的な作品はギアツの『インドネシアのある町の社会史』^(注3)という研究である。この本のなかでギアツはモジョクト市(仮名)周辺の諸社会集団が歴史的にどのように形成され、それらが都市—村落の連鎖関係のなかで、どのような社会範疇(ギアツ流に言えば、現象学的に真実の)を形成するかを論じた後で、こうした諸範疇が現前する一つの例として、村長選挙の過程で、どのような範疇が活性化され、それが実際の選挙の場で現出していくか、ということを分析している。

ギアツの分析によると、モジョクト市および村

落を形成するのは第1図で示したような10の社会範疇であり、この10のグループはそれぞれのレベルで、近代的対伝統的、エリートと大衆といった弁別をしめすことになる。こうした図式(ギアツの説明によれば、モジョクトの人びと自身が認識の枠組みとしている)が実際に現出する例として、村長選挙での各種候補者とその連関関係を描写している。ギアツの分析で重要なのは、まず基本的に二重の対立の軸、一つはサントリ (santri, 正統イスラム) 系か、アバンガン (abangan, 名目イスラム) 系か、ということであり、次にアバンガン系の方に都市か村落かで第2の軸が見られるという指摘である。

第1図 モジョクト市における文化・社会集団とその分類

知識人 (intelligentsia) (近代的/伝統的)	新プリアイ	改革派ムスリム知識人
文人 (literati) (エリート/大衆)	旧プリアイ	保守派ムスリム知識人
都市大衆 (都市/村落)	一般アバンガン	一般サントリ
村落エリート (反応的/非反応的)	アバンガン系村落リーダー	サントリ系村落リーダー
村落大衆	アバンガン系村民/サントリ系村民 (ジャワ主義者/イスラム教徒)	

(出所) Geertz, Clifford, *The Social History of an Indonesian Town*, ケンブリッジ (マサチューセッツ), MIT Press, 1965年, 140ページ 図5・7。

(注) 上記の表における二分法(たとえば「近代的」と「伝統的」)は、左側「近代的」が点線の上(新プリアイおよび改革派ムスリム知識人)、右側「伝統的」は点線の下全てを示す。以下、同様の意味を持つ。

そうした実際の選挙の動的な過程のなかに、錯綜した形でこうした文化類型間の対立と統合が現出するというのがギアツの選挙分析の主眼である。

ギアツのこうした分析以降、国家レベルにおいては、革命(revolusi)を標榜するスカルノ体制から「開発」(pembangunan)をモットーとするスハルト体制への移行が生じ、それに伴って、村落内外の政治秩序も大幅に変化した。こうした状況下、巨視的な政治・経済構造の変化についてはいくつかの議論がある一方で、村落内の微視的な政治過程研究については研究が不足している。新体制下のジャワ村落調査の大半は経済関係の分析が中心であり、ギアツのような観点による文化類型と政治的ネットワークの関係についてはほとんど行なわれてこなかったというのが実情である(注4)。

本論攷は、こうした背景を踏まえて、中部ジャワ北部のある村落における微視的な政治的関係を、特に1975年に同村で行なわれた村長選挙における諸派閥の形成と分裂の過程に注目しつつ、分析しようとする試みである。ここでこうした過去の村長選挙が採り上げられるのは、まず第1にこれがこの村落の現在の政治関係を決定した重要な事件であり、同村での現在の対立関係、端的に言えば政府与党のゴルカル(Golkar、職能集団の意)対保守系イスラム組織のナハダトゥール・ウラマ(Nahdatul Ulama、ウラマの覚醒、略称NU)の関係に重大な影響を及ぼしているからであり、第2にこの選挙の過程において各種の派閥形成の過程が、ギアツ的な文化論的分析の枠組みを越えて、遙かに複雑な要因によって決定されているということが明確になるからである。

そこでここで強調される視点は、まず選挙時の諸派を大きく弁別するイデオロギー的対立であり、さらに諸候補者の戦術、彼らを中心とした二者

間関係の連鎖(注5)の形成の様態である。さらにそれがより巨視的な政治関係との兼ね合いでどういった状況を現在の同村の政治秩序にもたらしめているかが記述される。

(注1) Geertz, Clifford, *The Religion of Java*, グレンコー, The Free Press of Glencoe, 1960年。また、これに関連するものとして、Jay, Robert, *Religion and Politics in Rural Central Java*, Cultural Report Series No. 12, ニューヘブン, Southeast Asia Studies, Yale University, 1963年がある。

(注2) ギアツはこうした政治・宗教的潮流のことをアリラン(aliran)と呼んでいる。Geertz, Clifford, "The Javanese Village," G. Skinner 編, *Local, Ethnic, and National Loyalties in Village Indonesia: A Symposium*, ニューヘブン, Yale University, 1959年, 37ページ。なおジャワの政党間の構成がこうした文化的要因について規定されているというテーゼに対しては、特に共産党(PKI)の拡大に関してその村内における経済的関係(階級分化)を強調する論点も可能である。しかしこうした論者も経済的関係が宗教・文化的な範疇で表現され完全に階級的にはならなかったことを認めている。こうした論者の代表的なものとしては、Wertheim, W. F., "From Aliran towards Class Struggle in the Countryside of Java," *Pacific Viewpoint*, 第9号, 1969年9月/Lyon, Margo, "Bases of Conflict in Rural Java," Research Monograph Series No. 3, パークレイ, Center for South and Southeast Asian Studies, University of California, 1970年。なお新体制後は、各種政党の簡素化(最終的にはGolkar, PPP, PDIの3構成)および県レベル以下でのこうした政党の活動が禁じられることによって、かつてのイデオロギー的百花繚乱状態は見られない。

(注3) Geertz, Clifford, *The Social History of an Indonesian Town*, ケンブリッジ(マサチューセッツ), MIT Press, 1965年。

(注4) 新体制下のジャワ村内の政治的ネットワークに焦点を当てた研究は乏しい。政党間の大雑把な見取り図についてはリドルがジョクジャカルタ特別区のクロンプロゴ郡(Kecamatan Kulon Progo)について分析している。Liddle, William, "Evolution from Above: National Leadership and Local Develop-

ment in Indonesia,” *Journal of Asian Studies*, 第32巻第2号, 1973年2月。東部ジャワのイスラム系農村については加納の短い記述があり, また中部ジャワの旧PKI系の農村については白石の分析があるが, どちらも経済関係の分析が中心で, ネットワークの連鎖についての記述に乏しい。加納啓良『バグララン——東部ジャワ農村の富と貧困——』東京 アジア経済研究所 1979年/白石隆「デサ・ンガラン——ゴルカルの村——」(『経済学論集』第47巻第3号 1981年10月)。ジャワにおいて経済関係が政治的影響力を直接的には生み出さないことについては, 関本照夫「農業をめぐる人のカテゴリーと相互関係」(『国立民族学博物館研究報告』第3巻第3号 1978年9月), さらにこうした権威の基盤について, 村長のタイプを比較したものにキーラー (Keeler) の研究がある。Keeler, Ward, “Villagers and the Exemplary Center in Java,” *Indonesia*, 第39号, 1985年4月。

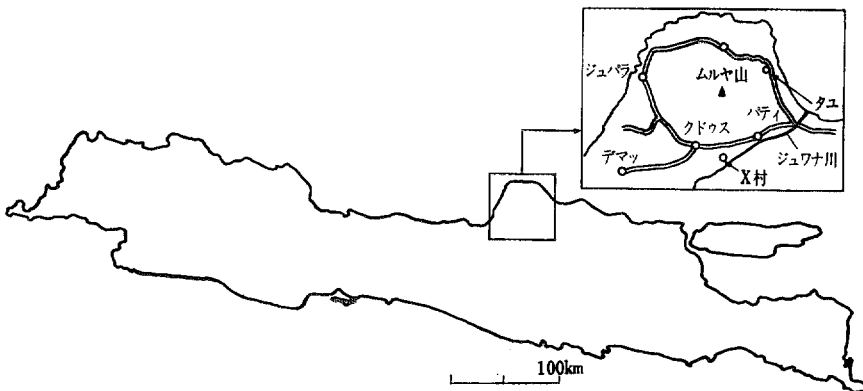
(注5) こうした社会構成の東南アジア的特徴については, 中根の簡潔なまとめがあり, それによると, こうした人間関係の原則は, まず特定の個人を中心とした可変的な, 境界の不明確なひろがりであり, ある原則が決定的な組織構成の基準にならないことが強調されている。中根千枝「東南アジア的社会構造の特質——人間関係についての一試論——」(山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会編『山本達郎博士古稀記念東南アジア・インドの社会と文化(下)』東京 山川出版社 1980年) 279~280ページ。

I 調査の背景

1. 地域の概況 (第2図)

筆者の調査したX村は, 中部ジャワ州 (Propinsi Jawa Tengah) のなかでも北部港湾地帯 (daerah pasisiran) とよばれる地域にあるクドゥス県 (Kabupaten Kudus) 東部A郡の南側に位置する。この北部港湾地帯は, 外部との交易の中心であったジャワ海に面しており, 歴史的にも海外の影響を多く受け, ジャワ島南部の諸地域に比べイスラムの影響力が強い。またクドゥス県は伝統的に工業の進んだ地域であり, ジャワの独特な丁子入りのタバコ (rokok kreteg) 産業のメッカ(注1)であると同時に, 繊維, 製糸, 陶器その他の軽工業が盛んであり, 経済的にはジャワ島内でも豊かな地域といえる。こうした影響はクドゥス市から9 km離れたA郡にも顕著である。クドゥス県は東に隣接するパティ県 (Kabupaten Pati) と並んで甘蔗 (tebu) の栽培の盛んな地域であるが, その製糖工場の旧支部がA郡の北部, Z村にあり, 現在は閉鎖されているものの一応刈り取られた甘蔗の集積地になっ

第2図 ジャワとクドゥス周辺



(出所) 筆者作成。

ており、その時代の影響で役人や教師などの、いわゆるカルヤワン (karyawan) が多い。また筆者の調査したX村の西側のY村には、インドネシアでも代表的なタバコ会社の一つであるジャルム (Jalum) 社の支店があり、多くの女性労働者を周辺の農村から吸収しており、それが顕著に雇用機会の拡大に繋がっている。X村はこうしたA郡の南部に位置し、北側の居住地区と南側の水田地区にほぼ二分される。同じA郡でも北部は丘陵と、全体的にムルヤ山 (Gunung Murya) の裾野に当たると言うことで、水害が稀で、稲作以外にも特に甘蔗の栽培に適している。南部はそのさらに南方に雨季に氾濫するジュワナ川 (Sungai Juwana) があり、全体的に傾斜の少ない地形であるため、川の周辺の水田は沼地 (rawa) とよばれて耕作不能で、また雨季には南側水田の大半が水没して、湖のようになってしまうため、農業的には郡北部に比べかなり劣るが、その他の就業機会の豊富さによって補われている (第1表)。

2. 調査の方法

X村は人口8111人 (1812世帯) で、さらに五つの区 (伝統的には dukuh, 現在は dusun とよばれる行政上の下位単位) に分かれている (第3図)。うち第2区は別名カウマン (Kauman, モスクのある地域) 区

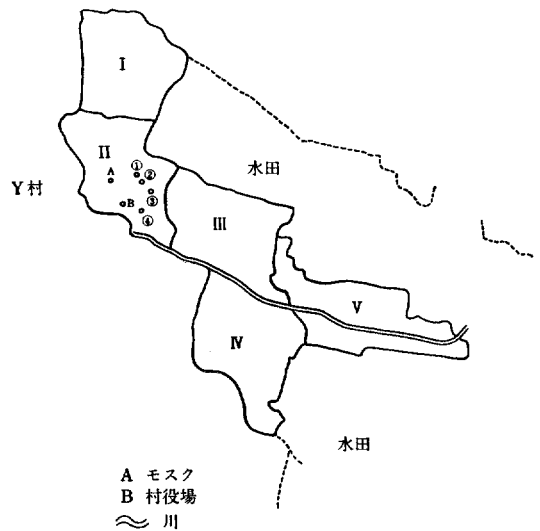
第1表 X村における生業 (1983年)

(単位: 人数)

農民 (petani)	625
農業労働者 (buruh tani)	1,199
工場労働者 (buruh industri)	107
建設労働者 (buruh bangunan)	28
商人 (pedagang)	269
交通運送 (pengangkutan)	13
官吏/軍人 (pegawai negeri sipil/ABRI)	51/7
年金受給者 (pensiunan)	8
その他	3,441
計	5,788

(出所) X村役場資料による。

第3図 X村概略図



(出所) 筆者作成。

(注) I 第1区 PNI/(PKI) マルトノ

II 第2区 NU (カウマン) ①ハッサン (宅)
②オマール (宅) ③ムストファ (宅) ④書記 (宅)

III 第3区 PNI スキジャン

IV 第4区 PNI ホノ

V 第5区 NU カシラン

とも呼ばれ、それに近接して村役場もあるため、政治宗教的にはこのX村の中心部であると言える。ただしこうした諸区間にはこれといった明快な地理的区別は存在せずひと続きになっており、これを何か独立した単位と考えるのは間違っている。このカウマン区は村唯一のモスクの存在が示すように、村内のイスラム勢力の牙城であり、彼らは前述したNU、すなわちインドネシア保守イスラム最大の組織に強い影響を受けている。筆者のX村における文化人類学的調査は、1983年10月から85年2月の17カ月間にわたってこのカウマン区、後述するハッサン宅に住み込んで行なわれた。この調査期間中に特に焦点があてられたのは、村内の政治的諸勢力 (とりわけNU勢力の現状) とその宗教・政治意識の変容についての微視的研

究である。カウマン区の経済関係の調査の後、X村内における現在の諸派閥の関係や形成の経過を村内のNUや村役場の有力者にインタビューする過程で、とりわけ筆者調査当時のNUの内部分裂ぶりを理解するのに重要な要因の一つと認識されるようになったのが、本論文であつかう1975年の村長選挙での各種派閥の生成と分裂の問題である。

この問題を分析するに当っては、まずその題材がすでに8年近く前に行なわれたことであるという回想的な性格を持ち、しかも選挙の過程や結果という、現在の村落内の人間関係にも微妙に尾を引いているデリケートな問題を扱っているということでもあるので、質問表を使用する広域調査ではなく、比較的少数の人々に対する人類学的な、長期にわたる集中的なインタビューという方法を用いた。こうしたインタビューは主に村長を含む村役人、現NUの幹部、そしてかつての立候補者で現在も村内に残っている人々やその取り巻き、一般の選挙参加者たち、さらにはA郡の役人でX村の選挙管理に多少とも携わったことのある人々に対していろいろな角度から行なわれた。こうした証言には調査者と被調査者のある種の親密な関係が必要であり、筆者の居住区がカウマン区だったという事情もあって、全体的にはNU系についてより詳しい情報が得られたという傾向がある。選挙時の細部の情報についての中核的なインフォーマントは、実際に選挙に参加して、各派の参謀として、敵勢力の伸長について分析する必要のあった人たちであり、彼らによる情報を適時その他の参加者からの情報(後にのべる中核的な選挙運動員になった人びと等)とつき合わせるという形で以下の調査データが得られている。

3. X村の政治・宗教的配置

カウマン区が保守系イスラム教徒の牙城であるとするれば、より中立的な、曖昧なイスラム教徒(ギアツの言うアバンガン、いわゆる名目上のイスラム)は第3区で強く、政治的には国民党(Partai Nasional Indonesia, 略称 PNI) 支持で現在は政府与党のゴルカルに編入されている。その他の政治勢力、たとえば共産党(Partai Komunis Indonesia, 略称 PKI) や改革派イスラム系のマシュミ(Masyumi) といった政党は、前者が第1区に多少影響を持っていたのみで、基本的にはX村の政治史はUN, PNIの二つの勢力の均衡関係によって成り立っていたといえる。

旧体制下では、こうした2大傾向はNU, PNI系の各種の組織に代表されていた。NU系はイスラム組織という性格を反映して、イスラム導師=キアイ(kyai)やその他長老を中心としたコーラン教育、マドラサ(イスラム系の小学校)の管理、そしてより政治的な活動に関しては青年組織であるアンソール(Ansor)あるいは中学、高校生を中心としたNU生徒会(Ikatan Pelajar NU, 略称IPNU)といったものが活動の中心をなしていた。NUに比べPNI系はこうした組織的な凝集力に弱い点があって、マルハエニスト青年団(Pemuda Marhaenis)といった政治活動中心の組織以外はむしろジャワの伝統的演芸の活動等が中心であった。しかし一方でPNIは村役場に基盤を置いていたから、キアイの個人的なリーダーシップにかなりの重きを置いていたNUとは好対照であった。この2大勢力を代表するのがNU側のキアイ・ファラック(Kyai Falak)^(註2)、PNI側のラリム(Lalim, 旧村長)の2人である。

新体制成立後、PNIのメンバーの大半がゴルカルに吸収され、PNIとしての同一性を保てなくな

った（以下の記述における PNI 系とは組織としてのそれではなく、あくまで政治宗教的傾向をさす）のに対して、NU 勢力はしばらくの間独自の対抗勢力としての力を保っていた^(注3)。新体制下、政党に対して政府の統制が強まり、NU が政府に対する唯一の対抗勢力となっていく過程で、X 村内でも村役場と NU 組織の数々の対立という形で緊張の高まる徴候が見え始めてきた。さらにこうした政治的状況は、一枚岩を誇っていた NU の内部にも微妙な亀裂をもたらすことになった。その一つは政府の「一元的忠誠」(monoloyalitas) すなわち公務員の強制的ゴルカル化、によって NU 活動家のなかからゴルカルに参加する人が出てきたということである。また、その反面全体的な NU への圧力によって NU の若手が特に急進的になったこともあげられる。さらにこうした状況に、かつて圧倒的な影響を保っていたキアイ・ファラックが高齢のため、実質的な指導力を失いつつあったという事情もつけ加わった。こうした全体的な不安定な状況下で 1974 年に村長 ラリム が死去し、村長選挙が行なわれることになったのである^(注4)。

(注1) クドゥスのタバコ産業の歴史とイスラムとの関係については、以下を参照。

Castles, Lance, *Religion, Politics, and Economic Behaviour in Java: The Kudus Cigarette Industry*, Cultural Report Series No. 15, ニューヘブロン, Southeast Asia Studies, Yale University, 1967 年。

(注2) 以下の人名は仮名である。

(注3) NU がキアイとその生徒間の宗教的紐帯を基盤として、特に農村部に強い支持基盤を持っていたため、組織としては旧・新体制を通じてかなりの持続性を保持しえたのに対して、PNI 系は一般に官吏層をその中心としていたため、新体制下でのゴルカル化によって徹底的に骨抜きにされた。NU と PNI の新体制下の活動については、以下を参照。

Ward, Ken, *The 1971 Election in Indonesia:*

An East Java Case Study, Monash Papers on Southeast Asia No. 2, メルボルン, Monash University, 1974 年。

(注4) A 郡および X 村における新体制下の各政党の得票率は次のとおり（ただし 1971 年度はいまだ 3 党制が成立していないが、A 郡の統計によればイスラム系政党の票は PPP, 非イスラム系のは PDI にまとめられている）。

(%)

X 村	PPP	Golkar	PDI	A 郡	PPP	Golkar	PDI
1971 年	23.0	61.6	2.9	1971 年	30.5	57.1	5.1
1977 年	38.3	36.9	3.6	1977 年	31.2	46.6	4.2
1982 年	31.8	56.0	3.7	1982 年	34.6	56.3	5.5

(出所) A 郡役所資料による。

II 村長選挙の政治過程

1. 候補者の認定

さてこうしたことを前提として、村長選挙の過程について見ていくことにしよう。ジャワ農村では一般に村長 (lurah) は、唯一の権力 (kuasa tunggal) という言い回しが示すように、公的には村内の政治、経済、宗教その他の諸活動の許認可権を全て掌握している。こうした一元性と並んで、特に村長用の職田は、少なくとも A 郡では 10 畝 (村民の世帯あたり保有水田は単純平均計算で 0.61 畝、また筆者の集中調査した 108 世帯では平均 0.69 畝) と広大で、しかもその質は村内の一等地である。したがって、村長になることで村内でも経済的な最上層部に参入できるため、村長選挙は各種候補者が入り乱れて熾烈な争いを繰り広げることになる。

ジャワ村長選挙においては、立候補者は第 1 次と第 2 次に分けられ、まず最初の立候補者は郡のレベルでの試験等の予備調査によって、その村落行政を司るにあたっての学力や背景、政治的傾向等が審査され、結局数名に絞られる。こうした候補者には明らかに泡沫的な人びとがいるが、一般にこうした泡沫候補の立候補には、いくつかの興

味ぶかい動機がある。

まず意図的な作戦として、候補者審査のための安全弁という理由である。村内でいくら影響力があると自惚れていても、学力不足、年齢の不適合（特に高齢の場合）、政府の立場からの政治的配慮その他で、いつ失格とされるか分からない。そのために、ある派閥のなかで、主なる候補者と、それが失格したときの準備のために代理（滑りどめ）を同時に立候補させる場合がある。この典型的な例が、後で述べるX村の現村長その人である。本人は全く無名の新人であり、あくまで人望のあるその父親の代理人であったわけである。

だがこうした原因以外に、まことにジャワ的な理由というのがある。その例が夢あるいはある種の啓示・天啓によるお告げであり、またジャワの伝統的呪医であるドゥクン (dukun) による予言等も、重要な出馬理由となっている^(註1)。

このようにして、作戦としてであれ、あるいはお告げによるものであれ、幾人もの候補者が立つ

訳であるが、A郡では各村で4～5人に候補者が絞られるのが通例である。ここで、X村の場合15人が立候補し、その内5人のみが試験および審査を通過して正式に立候補することになった。

第2表を見ても分かるように、15人の候補者中、ほぼ半数の7人がNUになんらかの形で関与しており、一方残りの半数はPNI系でその大多数は現在ゴルカルに吸収されている。

こうした諸候補者が決定するまでには、郡の審査委員会を含めていくつかの複雑な政治的取引や、影響力拡大のための努力が繰り返されたわけであるが、実際に候補者が5人に絞られる途中で、思わぬ事態が生じ、それが相互の協力関係のネットワークに各種の変動をもたらすことになった。

2. 有力候補の力学——NU と PNI

最終的な候補者が決定する以前から、特に有力候補と見なされていた人々がいる。NU系の場合カシランとハッサンの2人である。カシランはク

第2表 第1次候補者の背景（1975年）

人 名	政治傾向	職 業	区	備 考	T
カシラン	NU	製糖工場監督	4	NU 幹部	
アブドゥル	"	バスの車掌	4	上の息子（影武者）、現村長	○
マルトノ	"	陶器工場	3	NU 演芸関係	○
ハッサン	"	宗務課役場(KUA)	2	NU 青年組織（アンソール）長他	
ムストファ	"	金商人	2	" 第2区長	○
Bs	"	イスラム教師	4	現コミサリス PPP 長	
Jm	"	モディン	5		
スキジャン	PNI	製糖工場監督	3	PNI 青年組織第3区長	○
ホノ	"	学校教師	4	PNI 青年組織幹部	○
Pd	"	無職	3		
Ks	"	夜警係	5		
Ka	"	農民	3		
Hr	"	農民	4		
カルマン	"	夜警係	1	サブトダルモ (Sapta Darma)	
Sg	中立	村役場雑用	1	改革派イスラム (Muhammadiyah)	

（出所） 筆者調査による。

（注） (1) コミサリス PPP とは、開発統一党の村内代理人。サブトダルモとは有名なジャワ新興宗教教団の名。モディンとはイスラム関係の村役人。

(2) Tはテストの略、○は郡の審査に合格した人々。

ドゥス県の製糖工場で労働者の監督(mandor)を務めており、その職種上各農業労働者(buruh tani)との関係が深く、広いネットワークを持っているとされる。彼は若いころは不良(nakal)の傾向があったのを、キアイ・ファラックの影響によって、改心して敬虔なイスラム教徒に変身したもので、特に第5区で影響が強い。

これと相応して特にNUの牙城であるカウマン区で重要な影響力を行使しているのが、ハッサンである。伝統的なカリスマ的リーダーシップの典型がキアイ・ファラックであるとすれば、ハッサンは村内でNUの政治面についての実践的なリーダーシップを司っており、NU青年組織やモスク、マドラサの管理等、あるいは総選挙時のキャンペーン活動の総指揮を受け持つ等、X村のみならずA郡のレベルで重要な地位を占めている。上記の選挙についてはこの2人がNU系の中核的な候補であったことは、郡のレベルでの政府官吏たちもひそかに認めており、実際はそれが大きな問題であった。というも、1967年に始まる新体制以降、NU勢力はゴルカルの最大の敵として受けとめられており、村落部でその影響が拡大するのは全く望ましくないと考えられていたので、NU系の、政治的に活発な村長が誕生するのを避けようとする傾向が郡のレベルで存在したのである。

NUの側からすると、誰が村長になるにせよ、NU外の人(PNI系)になることは阻止しようということでは、ある程度基本的了解が成立していた。主要な候補者としてカシランを立て、その補助、あるいは協力者としてハッサンを立てると言うことにNUの幹部たちはある程度同意していたのである。

一方 PNI 系は選挙時にはすでに事実上解散状

態になっていたが、かつての組織での関係(マルハエニスト青年団)とか、ワヤン・ウオン(wayang wong, ジャワ影絵芝居の人間版)のグループによる繋がり等のネットワークを基盤とした選挙運動を繰り広げていた。ここで非常に強い候補者とされたのがスキジャンで、アバンガンの傾向の強い第3区を中心に、マルハエニスト青年団の第3区長として、重要な位置を占めていた。

さてこうした候補者たちと、彼らの支持者のうちでも特に影響力があると見做されている人びととの間の相応関係を一覧表にしたのが、第3表である。それぞれの派閥は自らの効果的な選挙運動のため、村内でも影響力のあるとされる人びとをできるだけ自らの派閥にとりこもうとするのは当然であり、さらにそうした人びとがどの派閥に属するかということについては、相互に詳しく分析を行なっている。とりわけ予想得票を計算する必要のある選挙参謀はこうしたことについて、各種情報を集め、ある種の社会学的分析を行なう必要があるが、第3表もこうした彼ら自身の分析を総合したものである。まず土台となったデータはハッサンおよびカシランを中心とした何人かの現村長組による、対立候補のマークすべき有力支持者(ポトー、次節参照)についての当時の詳細な分析である。彼ら是对立候補の支持者に対して各種の情報を集めると同時に、その結果にもとづき、それらを重要度の順にある程度ランク分けして選挙対策の基準としていた。ハッサンの解説によれば、このランクづけは、こうした人びとの家族関係(親族)の規模、経済状況、宗教・政治的活動、といった側面を総合して得られるというが、特に強調されたのは、村内に散らばった部下による、こうした人びとの近所での評判や人間関係の在り方である。このようにして、現村長組から、

第3表 有力支持者（ボトー）とその派閥（1975年）

人	職業	傾向	支持	区	人	職業	傾向	支持	区
※1	農民	NU	A	1	※26	農民	NU	Mu	4
※2	連絡係	NU-G	"	2	27	農民	NU	H-A	1
3	農民	NU-G	"	2	28	郡役人	NU-G	H-Ma	1
※4	農民	PNI-G	"	2	29	夜警係	NU-G	H-S	3
※5	精米業	PNI-G	"	2	30	高利貸	PNI	"	3
※6	製糖工場監督	PNI	"	3	31	農民	PNI	Ma	1
7†	製糖工場監督	PNI	"	3	32	農民	PKI-G	"	1
8	農民	PNI	"	3	33	キアイ	NU	"	1
※9	影絵芝居師	NU-G	"	4	34	ドゥクン	PKI-G	"	1
※10	農民	NU-G	"	4	35	市場役人	NU-G	"	1
11	農民	NU	"	4	36	夜警係	PKI-G	S	1
※12	農民	NU	"	5	37	NU	NU	"	2
※13	製糖工場監督	NU-G	"	5	38	農民	PNI	"	3
※14	農民	NU	"	5	39	影絵芝居師	PNI	"	3
15	ドゥクン	?	"	5	※40	農民	PNI	"	4
16	農民	NU	H-A	1	41	農民	PNI-PPP	"	4
17	モディン	NU-G	"	2	42	農民	?	"	4
18	農民	NU	"	2	43	農民	PNI	"	4
19	農民	NU-G	"	3	44	農民	NU	"	4
※20†	キアイ	NU	"	3	45	モディン	NU-G	"	5
※21	教師	NU-G	"	3	※46	区長	PNI-G	"	5
22	農民	NU	"	4	47	連絡係	PNI-G	"	5
23	農民	NU	"	4	48	連絡係	PNI-G	"	5
※24	農民	NU	Mu	1	49	郡役人	PNI-G	Ho	1
25	農民	NU	"	2	50	郡役人	PNI-G	"	4

（出所） 筆者調査による。

（注） (1) 数字の前の※は特に現村長組が重要視していた人を示す。

(2) 特にモディン（イスラム関係の村役人）、夜警係、連絡係、区長は皆村役場に所属する。

(3) Gはゴルカル（政府与党）を示す。現在 NU 系は一般に PPP（開発統一党）を支持し、PNI 系はゴルカルの支持者なので、NU-PPP 系は NU とのみ示し、特にゴルカルに支持変えをした者のみ NU-G と示す。また PNI でゴルカル支持者も単に PNI とのみ示し、PNI-G は旧 PNI メンバーで、現在村役人になった者を示す。

(4) 支持者の略称は、A=アブドゥル（事実上カシラン）、H=ハッサン、Mu=ムストファ、Ma=マルトノ、S=スキジャン、Ho=ホノ。また二重に書かれているのは、ハッサンの失格に際して支持変えをした人。以下の表では同様の略称を用いる。

(5) †は筆者調査時にすでに死亡。

(6) ドゥクンとはジャワの伝統的呪医のこと。

かつて選挙に関して村内でもっとも注目すべき人びとについての基本的データを得た後に、このデータを基に、さらに他派閥（特にムストファ派とホノ派）および選挙管理役の書記（スキジャン派）等の村役人の意見や情報を取り入れて、それによる追加分をさらに現村長組の諸々のメンバーとの議論を繰り返した結果作成したのがこの表である。こうした方法がとられたのも、まず選挙当時と筆者の調査時には8年の隔りがあり、かつてと今での有力者たちの変化や、すでに死亡している者

もいるという事情があつて、過去のそれについてはあくまで実際の選挙参加者たちの判断に任せる必要があつたからである。さらにマルトノ、スキジャンといった候補者あるいは一部の選挙関係者は村外に転居し、その結果情報の密度や当時の情報収集能力という点では現村長組の分析にある程度依存する必要があつたからである。この点では現存する他派閥の選挙参加者がしばしば限定的な認識しか持ち合わせていないのに対して、現村長組のそれは、五つの区に分かれ、1800世帯を超える

X村の状況全体についてはるかに組織的で綿密であった。ゆえにここに示したのは、現存するいくつかの派閥(特に現村長組を中心とした)による、選挙戦略のための社会学的自己分析のデータであるが、表中のかなりの部分については、事実関係の確認のためにさらにインタビューが行なわれ、事実関係の正しさについては疑問の余地はないと思われる。

こうしたデータが、実際の選挙結果とよく相応しているのは、たとえば得票数がアブドゥル(1位)とスキジャン(2位)との間で二分され、3位がマルトノで、ムストファ(4位)とホノ(5位)がほとんど票を取れず末位を競い合ったという得票率の順序が、ここで示した各派閥が抱え込んだ有力支持者の人数の順序とよく一致していることにも現われている。NUの政治部門担当として、かつも総選挙対策に携わってきたハッサンは、実際彼のこうした分析にもとづいて実際の村長選挙時の得票率を予測し、特に現村長の得票に関しては、ほぼ50票の誤差で予測したといい、そうした正確さはカシランも認めている(註2)。

また、後に述べるような有力者の分布についての特徴的な傾向、たとえばマルトノ派の地縁性についても、書記その他の証言によれば、マルトノは主に第1区でのみ票を獲得したということであり、その支持者を示す表の傾向と一致している。こうしたことからこの表に示された分析が、選挙での有力支持者と各派閥との関係をかなり確実に示していると言えよう。

このようにして示された当時の注目すべき支持者たちの多くは、現在の筆者の調査時でも明らかに村内で重要な影響力を持っている。類型的に言えば、NU関係で、イスラムに関する点でなんらかの指導的立場を保っているもの(第3表の2, 10,

11, 13, 17, 21, 23, 25, 26, 33, 37, 41, 42, 45)、夜警係や連絡係に代表される、村民との直接的な接触の機会が多い村役人(2, 29, 36, 46, 47, 48)、村民に人気のある影絵芝居師あるいはドゥクン(9, 15, 34, 39)、製糖工場で農業労働者と接触の多い監督や精米工場の管理者(5, 6, 13)、旧PNI・芸能組織関係者(30, 38, 39, 46)等であり、残りの多くは典型的な篤農および一部の郡役人である。

さて第3表(さらに実際の得票結果)から明らかなように、諸派閥の規模からいってカシランとスキジャンが2大勢力であり、これにハッサンおよびマルトノが続いているという状態になっている。NU側の基本戦略としてカシランとハッサンを候補者とし、かれらを軸として選挙戦を戦う計画であった。ところがここで問題となったのが、この両者の資格問題である。まずカシランは、審査の際に彼の高齢のために、失格する可能性が出てきたのである。こうした判断をもとに、彼の代理候補として、彼自身の息子(アブドゥル、現村長)が父の支持によって候補者にされることになった。しかし、この息子がバスの車掌や影絵芝居上演の際のスピーカーの設置役と言った目立たない職に就く全く無名の人物で、しかも年齢が23歳(註3)ということからNUの内部でも強い反発が出た。カシランが立候補を断念した後、NUの幹部が集合して善後策を検討したが、この際に若年のアブドゥルを候補者として立てるという決定に対して、NUの幹部の重要な部分が賛成せず、結局ハッサンのみがアブドゥル擁立に賛成し、マルトノおよびムストファは自ら候補者として立つことになってしまったのである。

一方ハッサンは、郡役人の説明によると、X村の候補者としては最も当選可能性の高い人であり、

しかも反政府的傾向の強いアンソールA郡支部長であるという理由から、試験にはパスしたにもかかわらず政治的配慮から失格とされた。こうして彼の築いてきたネットワークは約束どおり、カシラン-アブドゥル支持（一部の例外を除いて）にまわることになった。

3. 幹部の分裂

さてここで、当時のX村のNU共同体の指導層の構成をしてみることにしよう。NUのX村レベルでの組織は現在に至るまで明確ではなく、特に年長者の間では、明確な組織や役割分担が形成されたことがない。ただし、村での唯一のイスラム系小学校（マドラサ）の管理については、NU年長層の重要な部分に関与しており、また、より政治的に活発なアンソールについては、より明確な役割分担が設定されているので、その二つについて見てみることにしよう。

第4表および第5表に明らかなように、ここでわれわれは、NUの幹部の間にかに微妙な亀裂ができてきたかをみることができる。本来はPNI系に比べはるかに求心的凝集性の強いNU組織で

あったが、選挙前には幹部の間で、アブドゥルーハッサン派、ムストファ派、マルトノ派、さらに対立するイデオロギーの旧PNI系である、スキジャンの支持者まで出てくる始末である。

一方、PNI系に関して言えば、常に強い凝集力を示すNUとは異なり、当時すでに解体していたが、PNI系の幹部（たとえば青年組織とか、芸能集団と言った）が蝟集したのが、スキジャンであり、一部彼の方針に同意しないのがホノに流れたとみていい（第6表参照）。

（注1） 実際は選挙の諸々の過程のなかでこうした超自然的要因は非常に重要視される。多くの候補者が夢のお告げを立候補への決断の材料としているし、自分の成功への確信を求めてドクンやキアイ廻りがしばしば行なわれ、予言や祝福をしてもらう。さらにこうした人びとの信仰を逆手に取って、自らに有利な証言をしたドクンを通じて自らの影響を拡大する努力がなされたりする。

（注2） ハッサンはこうした選挙時の影響力についての分析的データに関しては、その情報を総選挙時にも応用しており、特にゴルカルの幹部となった現在は、そのデータを基にゴルカルの選挙戦略や得票数の予測を行なっている。

第4表 NU 幹部（マドラサの管理中心、1965年以前）

地	位	人 名	職 業	支 持 者
NU X村支部長		オマール (37)	モディン（後解雇、農民）	S
会長 (ketua)		Sj (2)	製糖工場監督、後連絡係	A
書記 (penulis)		Nj	農 民	H-A
財務 (bendahara)		カシラン	製糖工場監督	A
補佐 (pembantu)		Sl (18)	農 民	H-A
		Sb	農 民	Mu
		Am (25)	農 民	Mu
校長 (kepala sekolah)		ハッサン	宗務課役場	H-A
教師		Mn (45)	無職（後モディン）	S
		ムストファ	金商人 (bakul mas)	Mu
		Ng (10)	農民	A
		Mk	イスラム教師 (guru agama)	Ma

（出所） 筆者調査による。

（注） (1) 会長以下はマドラサの管理を主体とする委員会の構成員、また校長以下は実際に教育に携わる人々。

(2) かっこ内の数字は第3表との対応関係を示す。数字のない人々は、諸候補者支持があくまで消極的であったことを示す。

第5表 NU 青年組織（アンソール）幹部（1965年以前）

地	位	人 名	職 業	支 持 者
X 郡	支 部 長	ハッサン	宗務課役場	H-A
X 村	支 部 長	ムストファ	金商人 (bakul mas)	Mu
第 1 区		Nr †	イスラム教師 (guru agama)	A
		Sd (28)	A 郡役人 (28)	H-Ma
		マルトノ	陶器工場, アンソール芸能部	Ma
第 2 区		ムストファ	(X 村支部長と兼任)	Mu
第 3 区		Ks	農 民	A
第 4 区		Ad (21)	イスラム教師 (21)	H-A
		Ng (10)	農 民 (10)	A
第 5 区		Kb (13)	製糖工場監督 (13)	A
		Mn (45)	無職 (後モディン) (45)	S

(出所) 筆者調査による。

(注) (1) † は選挙当時死亡。

(2) カッコ内の数字は第3表と対応。

第6表 PNI 系メンバー（1965年以前）

地	位	人 名	職 業	幹 部	支 持 者
X 村	支 部 長	ホノ	小学校教師	○	Ho
第 1 区		Ms	小学校教師	○	S
"		Bs	農 民		Ma
第 2 区		マッノ	村書記	○	S ? Ho ?
第 3 区		スキジャン	製糖工場監督	○	S
"		Kr (38)	農 民		S
"		ワギニ (30)	高利貸		H-S
"		ジャミン (39)	影絵芝居師		Mu
"		Bs	農 民	○	S
第 4 区		Sr	製糸工場	○	S
"		Tr	"	○	Ho
第 5 区		Sr	無 職 [連絡係(47)の子]		S
"		Ms (46)	区 長		S

(出所) 筆者調査による。

(注) (1) ○は PNI の各区幹部を示し, ○のない人は演芸 (kesenian) の組織に所属していた人を示す。ただし1965年以降これらの組織はほとんど機能していない。

(2) カッコ内の数字は第3表と対応。

(注3) 立候補の年齢は25歳以上と決められており, これは郡の審議会にかなりの金を積んで馴れ化したと噂されている。

III ネットワークの基本戦術

さて実際の選挙の場では広大な村落全体に対してできるだけ影響力を拡大するために, 自己を中心としたネットワークが形成される。これが彼らの言葉でいうポトー (botoh, 直訳すればギャンブラ

ー, プレイヤーで中核的な支持者, 上層の運動員のこと), およびサベット (sabet, 剣, 刃の意でポトーの部下のこと) という人びとである。

ポトーとサベットは, 候補者を中心として同心円上に構成される。候補者の直属の部下がポトーであり, その配下として, 直接的に村民に接するのがサベットである。それぞれの候補者はこうしたポトーおよびサベットをできるだけ全村に万遍なく配置するよう心掛けるわけであるが, どういう人をポトーとして用いるかは, その候補者自身

の人間関係の広がりや戦術的配慮にもとづく。

1. ボトーの選択

このようにボトーの選択にはいろいろな要素が絡み合ってくるが、こうしたボトーの選択には気を付けなければならない点が多いとされる。

まず第1に、立候補というのはとにかく金がかかり危険な仕事であるが、こうしたことを逆利用して自らはボトーとして、見込みのない候補者を煽りたてて立候補させ、失敗させようとする場合があると言うことである。ハッサンの証言では、X村の泡沫候補の場合や、隣村での選挙の際にはこうした戦術がしばしば用いられたという。

第2に、これと同種であるが、ボトーが候補者を助けるふりをして、実は自分の利益のために行動しており、なんらかの口実をつけて金その他を要求するということがある(註1)。

第3に、いわゆる二重スパイという問題がある。ハッサンと現村長組が選挙協力をする以前から、こうしたボトーやサベットの形成は始まっていたわけであるが、現村長組が自らのボトーと信じて疑わなかったAという農民は、実はハッサン自身のボトーであり、それゆえハッサン側としては、現村長組の動きをかなり正確にモニターできたという。だが当然のこと、こうしたスパイ、二重スパイの可能性は常に存在するわけで、それゆえボトー選択のためには細心のチェックが必要である(さらにこれがサベットのレベルになると、候補者自体が全部を管轄するわけではないので、こうしたスパイはより多く存在することになる)。

最後にこれが最もしばしば起こることであるが、かつてのボトーが、候補者の当選以降、彼の協力の見返りとしての報酬を要求し、それが満たされぬと、敵側に廻ってしまうということがあつた。たとえば、前村長の場合、彼の実兄がボトー

として働き、当選後は報酬として広大な水田を要求して断われ、それ以降、村会議の場でしばしば動議(motie)を提出して村長を訴えたりして、妨害活動をしたという。同様のことは、ハッサン自身にもいえるわけで、彼は事実上現村長組のボトーの一種のようになったわけであるが、現村長の無能ぶりに嫌気がさし、もし再び選挙があつたとしても、今度は彼の支持はしないと今から公言している始末である。

2. サベットの形成

さてこうしたことに警戒しつつ、ボトーの選択(ハッサンやカシランの場合、各区5人ほどのボトー)をした後、次にサベットが構成されるわけであるが、サベットはボトーの選択にまかせ、それぞれ1区あたり10ないし25人程度を構成する。サベットの選択は、候補者がボトーを選択するのと同様の各種の原則が働いているが、少なくとも、ある特定候補の支持にまわる以上、なんらかの形で、公約的なものが利用されるのが普通であり、候補者の考えをすこしずつボトーが広めていくことで、自分の周辺に数名のサベットを形成する。これを単純計算しても、100人近いサベットがいることになるが、実際候補者が直接管轄するのはボトーだけであり、サベットはボトーの責任に任せるといふことである。どの候補者の場合も、基本的にサベットがおおびらに候補者の家に立ち入るのを禁止しており、候補者はボトーを通じて各種情報をえることになる(註2)。

各候補者は対立候補のボトーをある程度までは察知している。一方実際に村民の間に入って働きかけるサベットの実態はできるだけ隠し、自ら誰のサベットか公表しない努力は必要である。ハッサンの場合、こうしたサベットを2種に弁別し、明白なサベット(sabet jelas)と隠密のサベット

(sabet gelap) の2グループを作った。前者は自らハッサンのサベットとして、自分のアイデンティティーを比較的明確に打ち出すサベットであり、後者は中立を装って、情報集めに専念するサベットで、言わば間諜役である。他の候補者に比べ、こうしたサベットの操作の技術にかけては、ハッサンが群を抜いて綿密であり、こうしたことが彼の協力した現村長組の当選に繋がったようであるが、こうした陣営の形成がまず、対村民戦略の基盤となるわけである。

(注1) 後に述べるような、NU内強硬派のムストファが評判の悪い影絵芝居師を用いたという例も結局こういう関係であったとNU内ではしばしば解釈されている。

(注2) サベットの役目として特に重要なのは、情報収集による人びとの範疇分け、そしてそれによって明らかになった中間派を懐柔するための金銭の配布、各種の宴を催したりする努力である。だがハッサンの証言によると特にカウマン区ではこうした金銭によって、NU系支持者をPNI系支持者にかえるのは至難の技であったという。

IV 各候補者の支持基盤

さて、こうしたボトーおよびサベットをめぐるネットワークの構成原理を見たらうえで、もう一度先ほどの候補者とそのボトーたちの関係を分析してみることにしよう。

すでに明らかなように、一般に凝集力の強いとされるNU内部において、アブドゥル候補への不満から3派に分裂することになったが、その結果それぞれの候補者は同じイデオロギー的傾向のなかで、自らの影響力を拡大しなければならないという、困難な課題を課せられることになったのである。同様のことはより穏健な形でPNI系の両候補の並立という事態にも当てはまる。こうしたな

かで、諸候補者はいかなる方法で自らの影響力を拡大してきたのであろうか。この点を第3表のデータを基にしつつ分析してみよう。

1. イデオロギー中心派

(1) ハッサン

さてここで興味深いのは、それぞれの候補者によって、それを支持する人びとの傾向や、支持のための原則自体がかなり異なっているということである。まず弁別しやすい政治・宗教的傾向を見よう。イデオロギー的に見ればX村はNU、PNI(一部PKI)と分割されることはすでに示したが、第3表を見てみると、これが当てはまる場合とそうでない場合があるのが分かる。

まずイデオロギー的な傾向が特に顕著なのは、ハッサンのケースである。第3表に挙げられた12人のハッサン支持者のうち、11人がNU系列で、1人だけPNI系である。このことはハッサンの基盤がそのイスラム性、とりわけ組織としてのNUの幹部であり、活動家である(つまりアンソールのA郡支部長と同時に、マドラサの校長その他)ということに強くかかっているということを示しており、彼自身、自分の最大の政治的資源は彼がNUという組織のなかで築いた地位によるものであると認めている。

(2) ムストファ

同様にイデオロギー性の強いのは、ムストファのケースである。彼の場合、彼を支持する人びと(たとえば彼の兄である第3表の②, また同②, あるいは第4表のSb, および彼の弟であるAs等)は、現在に至るまでX村のNU共同体でも、強硬派に入り、村役場に対しても最も批判的である。彼らの多くは強硬な、頑固一徹な(ジャワ語で keras) 性格の持ち主として知られており、いわば自ら信念を以て突っ走るような傾向がある。このことは彼が

近年引き起こした殴打事件^(註1)に象徴的に現われている。このグループの関係者は、たとえば支持者の As の三男が現在イスラム系野党の開発統一党 (Partai Persatuan Pembangunan, 略称 PPP) の村レベルでの代理人 (komisaris) を務めていることからわかるように、はっきりと反村落行政的な色彩を打ち出している。

(3) ホノ

PNI系のホノとスキジャンを比較すれば、ホノの方が、自ら PNI の積極的な活動家として旧体制時にはNUのハッサン辺りとしばしば村落行政等について論じあったようである。ゆえに基本的には組織としての PNI (これは選挙当時組織的にはすでにNUとは比べ物にならないくらい弱体化していた) に依存しており、当時小学校教師(現校長)だということもあって、そのボトーの大半は、彼が関係深かった村のスポーツ集団(特にサッカー等を中心とした)の若者、および PNI 系の教師仲間を中心として構成されており、範囲として非常に限定されたものである。

2. 非イデオロギー中心派

以上の人びとがかなりイデオロギー的側面を以て、自らの政治的影響力の基本としていたのに対して、残りの2人、すなわちアブドゥル派、およびマルトノ派(スキジャン派もこれに加わりうるが)は、イデオロギー面でもはるかに複雑な様相を呈している。カシラン派とされた重要人物には、NU系が8人に対し、NPI系が5人もいるし、またマルトノ派に至っては、イデオロギー的にはほとんど統一性がないのではないか、と思われるくらいである。NU内部では、ハッサン派やムストファ派がかなりイデオロギー中心のアプローチを取ったのとは対照的である。この点を一つ一つ分析していく必要がある。

(1) マルトノ(地縁派)

まずマルトノの場合である。彼はNU青年組織アンソールの第1区担当であり、特にかつてNUでも演芸のようなことをした場合の担当という比較的重要なでない役回りである。彼のボトーのメンバーを見て気がつくのは、それらが全部第1区に集中しているという事実である。この点彼以外の候補者が自分の支持者を各区に分散しているのとは大きな差があり、明らかにマルトノはこの第1区という地縁関係を以て自分の基盤にしたという形跡がある。

前述したイデオロギーの問題と並んで、こうした区を中心とした地縁関係も、ある程度まで重要である。X村内の五つの区は、ある種のジャワ農村のような散村型ではなく、連続的でおたがいの境界が見た目には明確ではないが、ある程度までは、相互間の偏差がある。まず地理的に、北に行くほど郡庁および幹線道路に近くなり、一方水田はその大半がX村の南側にあるので、第1区では、役人、警官、教師などが多く、南側の第4、5区辺りは専業農家や、雨季になると水没する水田で、自家製のカヌー式の小船を用いて、漁業を営む世帯等が目につく。

こうした職業的な差のほかに、政治・宗教的には、村で唯一のモスクのある第2区はNUの強固な牙城のひとつであり、ハッサン、ムストファ、あるいはキアイ・ファラックといった人びとはここに住んでいる。カシランのいる第5区もまた、重要なNUの拠点の一つとされ、総選挙の際等にその強さを発揮する。これと対照的なのが第3区であり、一般にPNI系の牙城とされている。主要なPNI系の幹部が住み、芸能活動の諸組織(たとえばかつてのワヤン・ウォングループや、現在のガメラン演奏の会)等もここにある。

こういった区ごとの特色の他に、基本的にジャワの社会関係では近隣性は親族と同等の重要な地位を占めていることはつとに指摘されていること(註2)であり、実際こうした近隣性は政治的影響力をかかんがえる際には、ある程度までは重要である。その理由として近隣の協力義務という規範以外にも、人びとの間での期待、すなわちもし自らの近隣から村長がでたら、いろいろな面で便宜を図って貰えるだろうという期待があるという面も見逃せない。たとえば村長が広大な職田を所有するようになることによって、農業労働者(buruh tani)に労働機会が増えたり、その他の経済的諸便宜を図ってもらえるといった、経済上の期待、あるいは村落行政における諸々の手続き上でも、近所のかおなじみとして、斟酌してもらおうといった要因である。

この点で、マルトノの場合まず重要なのは、第1区に他の候補者がいなかったという事実である。これと対照的なのが第2区であり、すぐ隣合わせにハッサン、ムストファ、そして旧NU長で何とスキジャン支持のオマール老、さらにアブドゥルを支持するキアイ・ファラックと言うように居住しており、地理的にも激戦区になってしまい、近隣ということは決定的な意味を持ちえない。

しかしさらに付け加えれば、こうした第1区の緊密な地縁性の別の要因としては、そのもつやや特殊な性格があげられる。職業面ですでに述べたように、第1区には教師、役人といったある種の村落レベルの知識人層とでもいえる人びとが比較的多いが、その影響として、政治的に言うと、第1区はかつてPKIの影響を受けた一派(註3)が住んでおり、他の区とは独自の活動をしていたという点である。新体制以降、こうした勢力は一掃されたが、何らかの形でそれにかかわったりし

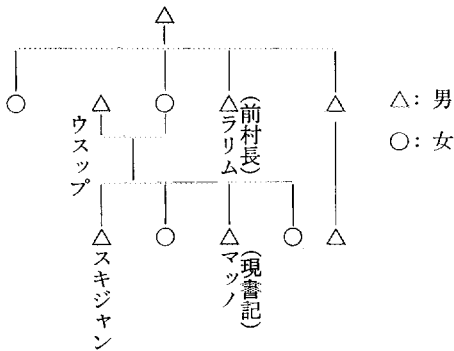
て、他の組織(NU および PNI)とは一線を画していた人びとや、元々それらに加わらなかった人びとなど、これといったコミットメントの対象となる組織がない人も多い。たとえば第2表のカルマン(Karman、第3表では00)などはもともとNU系で、キアイ・ファラックの下で一時コーランの朗誦(ngaji)を習っていたが、肌が合わなくなり、X村では珍しいジャワ神秘主義(kebatinan)の一派であるサプトダルモ(Sapta Darma)という宗派に当時は所属していた人である。こうした人がマルトノのボトーになるというのは、結局のところ、地縁以外のこれといった原則で他の候補者と関連できなかったからであり、本人もまたマルトノと近所であるということとその支持の理由としている。

同様のことはマルトノ側からも言えると推測される。すなわちもともとNU系で、比較的重要でないポストを占めていた彼は、結局のところNUの他の勢力(特にアブドゥルハッサン組)と対抗するには、こうした第1区の特長性を利用した地縁性しか頼る物がなかったのではないかと推測されるのである。

(2) スキジャン(複合派)

さてマルトノ派がこうして第1区という地縁的關係に自らの選挙基盤を置いていたとすれば、スキジャンおよびカシランの場合はまた別に関係への依存が見られる。マルトノが極端に地区主義に偏ったのに比べて、この両者の場合はるかに広範囲の影響力に頼っている。特に興味深いのは、そのボトーの範囲が彼らの背景である政党の傾向だけでなく、対立党派にまで至っているという事実である。これについては、まず彼らの系譜や経歴を考える必要がある。ここではまず、現村長組にとっての最大のライバルとなったスキジャンの場

第4図 スキジャンをめぐる系譜



(出所) 筆者作成。

合から考察する。

まず彼の系図(第4図)をみると分かるが、彼の母の兄(pak dé)に当るのが前村長のラリムである。この前村長が、かつてのX村では、NU側のキアイ・ファラックと権威を二分する存在であり、PNI系の中心人物であったことはすでにのべたが、スキジャン自身の父はウスップ(Usup)と言い、むしろ彼はNU系の人物である。このウスップの4人の子の1人がスキジャンであり、もう一方の男子が、X村書記(carik)であるマッコ(Makno)である。この事実を見ても分かるように、このスキジャンをめぐる人びとが、村落行政の中核を担っており、こうした村落行政関係者にその重要な地盤を持っていることは明白である。そのことは彼のボトーとして、区長(kamituwa)や、連絡係(kebyan)が多数占めているという事実からも分かる。こうした行政機関は従来、PNIと密接な関係にあった訳で、その点では当然である。ただしこの村の書記について、二つの問題がある。一つは彼が村落レベルでの選挙管理の責任を担っていたため、自らの支持を明確にしなかったということである。一方彼は現在に至るまで非常に不人気で、その書記としての態度があまりに官僚的す

ぎるという点から、X村で最も嫌われている人間の1人となっていることである(註4)。

仕事の面では、スキジャンはカシランと同様に製糖工場の監督(mandor)であり、こうした点を考慮に入れても、彼の持ちうる力の拡がりNUの対立候補に充分に感じられたのは、言うまでもない。

(3) カシラン—アブドゥル(複合派)

さて、こうした諸候補者との対比から、現村長組であるカシラン—アブドゥルの選挙基盤を見ていく必要がある。この際中心的なのは子のアブドゥルではなく、あくまで父のカシランである。カシランの青年期は、X村はむしろ四六時中暴力ざたが起きる村という評判があったと言われる。こうした状態で、いわば現在のNU共同体の基盤を作ったとされるのが、キアイ・ファラック自身である。彼は他のキアイとよばれるイスラム・リーダーたちがしばしばそうであるように、積極的に村の不良たちに近づき、彼らと諸々の活動とともにすることで、漸進的に彼らをイスラム倫理の方へ引き込んでいこうとしたわけである。こうした不良青年の典型がカシランである。かつては有名な不良(ジャワの伝統ではしばしばジャゴ(註5)と呼ばれる)であったカシランは、キアイ・ファラックの影響で現在ではX村でも指折りの敬虔なイスラム教徒に変身した。現在の彼の敬虔さについては疑問の余地はなく、NUの組織のなかでは最年長の1人である。しかし、当時まだ生きていたキアイ・ファラックの正式の支持を得ていたのが彼だったから、もし正式に立候補するとすれば、NU系の幹部としてもそれに対抗する手立てはほとんどなかっただろうと言っている。

一方、彼がジャワ語でいうところの不良(nakal)であったために現在に至るまで、かつての不良仲

間（その多くがPNI系）とも連絡があるという点が重要である。この点はスキジャンと共通する要素であるが、従来NUの範囲だけで生きてきたハッサンやムストファといった若手がこうした許容性を一般的に欠いているのに比べると好対照である。このことが彼の支持者層をNUだけでなくPNI系の人びとにまで拡大しえた理由の一つである。

こうした背景の他にもうひとつ重要な要因としては、カシランの職業である製糖工場の監督という仕事による関係が挙げられる。この工場は領域（担当地区）の甘蔗伐採、製糖の中心になっているが、各村落で甘蔗の植え付け、栽培、伐採等に用いられる諸々の農業労働者の監督役がカシランの仕事であり、相当人数の労働者の監督を行なわなければならない。また労働者の賃金の支払いは工場から、こうした監督を通じて行なわれるわけで、諸々の労働者との関係はかなり密接にならざるを得ない。さらに第3表を見ればわかるように、3人のポトーは彼と同じく監督であり、いわば仕事仲間である。

こうした背景が、彼の勢力範囲を最大限に広げる役割を果たしたわけであるが、これが息子のアブドゥルになると、全く別問題である。中学(SMP)を卒業した後は、バスの車掌や影絵芝居でスピーカーを設置し、調整する役といった仕事をしてきたアブドゥルは、ハッサンやムストファと異なり、組織としてのNUの内部で幹部になるとか、その他の活動に携わっていたとかいうわけではない。言わばNU共同体のなかでも、全く目立たない存在であったわけで、しかも年齢的に立候補可能年齢の25歳を下回っていたのだから、NU内部で罵々たる反対が出て当然である。こうした反対からNUが3派に分かれ、それがNUの指導層をいかに分裂させたかは第4、5表に明確に現われ

ている。このアブドゥルが当選できたのは、結局のところ父であるカシランと同盟者のハッサンの影響力の総和によるもので、けっしてアブドゥル自身のそれではないことは明白である。

3. 例外的関係

以上に述べた全体的傾向に加えて、一部のより錯綜した関係の例がいくつかある。たとえばムストファの場合、そのポトーとして、PNI系で芸能組織に属し、飲む、打つ、買うでNU関係者の間で評判の悪い第3区出身の影絵芝居師（dalang）を用いている。NU系のハッサンもまた、この影絵芝居師の遊び仲間のワギニ（Wagini, 第3表の30, PNI 青年組織）という人物を重要なポトーの1人として加えている。

さらに顕著な例として、かつてのNUの形式的な村支部長にあたるオマール（Omar）老の例がある。彼は自らNUの重要な幹部の1人であるにも関わらず、NUにとってもっとも忌避すべき対立候補であるスキジャンの第2区におけるポトーを務めており、そのことは現在においてもNU共同体内部での悪口の種の一つとなっている。

こうした例は周辺の要因として、政治的影響力の最大限の拡大という命題からでてきた選択である。まずムストファと影絵芝居師の場合、現村長およびハッサン組に対抗するには、NU内での勢力拡大が限界であると見なしたムストファ側がかなりの金を払って、PNIに人気のある彼を引き抜いたものである。一方ハッサンの場合、このワギニという人物は、曾祖父を同じくする血縁関係ということで彼に協力したらしく、離婚を17回も繰り返すワギニに対してハッサンは好感情を持っておらず、その起用はあくまでハッサンの地盤の一つである第3区の基盤がためのためである。

元々X村のモディン(modin, イスラム関係の村役人)

第7表 各候補者と支持基盤（1975年）

候補者	党派	主な支持基盤
ハッサン ムストファ マルトノ カシラン (アブドゥル) ホス スキジャン	NU NU NU NU PNI PNI	NUの組織関係(アンソールを中心とした)、第3区の一部 NU内強硬派 居住地(第1区)中心(イデオロギー色弱し) NU正統派、第2区(キアイ・ファラック)および第5区、監督としてのネットワーク、かつての不良仲間(PNI系) PNIの組織関係(特に教師関係)、第4区 PNI正統派、行政関係(前村長の影響下)、演芸集団等、第3区

であり、かつ形式上のX村NU長であったオマール老は、X村村役人のゴルカル化の際に署名にかんする手違いから職を解かれ、その穴埋めとしてこの村長選にはぜひ立候補の意向をもっていた。しかし、NUの幹部の支持を得られず、それを逆恨みしてNUにとっての対立候補であるスキジャンに走ったという事情である。

このような支持者層の傾向を一覧表にすると第7表のようになる。ここではそれぞれの候補者が、イデオロギー、地区、職業によるネットワーク、組織、その他の一般的な人間関係の連鎖といった諸々の条件を基盤として派閥構成を行なったということが示されている。そしてこうしたいくつかの政治的資源を重層的に使用できたのが、現村長組の成功要因である。

(注1) 筆者の滞在中に、ムストファは自分の田に無断で入って風揚げをしていた子供を殴って気絶させ、警察ざたになり、刑務所で数カ月の禁固刑に服している。これに対して近所のひとの反応は、あのきつい性格(watak keras)の男だからさもありなん、といったものである。

(注2) 近隣のこうした協力関係については次を参照。Jay, Robert, *Javanese Villagers: Social Relations in Rural Modjokuto*, ケンブリッジ(マサチューセッツ), MIT Press, 1969年, 特に第8章。

(注3) 彼らは少数であったがレクラ(Lembag Kesenian Rakyat, 人民芸術協会, PKI系の組織, 略称 Lekra)の活動に参加していた。A郡は全体としてPKIの活動は制限されたものであったが、製糖工場跡のあるZ村だけはインテリが多く、その勢力がかなり

あったとされる。

(注4) 書記としての職田にくわえ、積極的な経営規模の拡大、およびトラック、魚の養殖場の所有等を通じて、現在のX村で疑問の余地なく最も豊かな人であり、PNIの幹部の1人で現在のゴルカルの中核人物である。しかしその性格のため非常に嫌われており、かつて彼が選挙の際、スキジャンと喧嘩しホノ支持を打ち出したために多くの人がホノにそっぽを向いたという「噂」が現在でも村民の間で語られている。なお彼は自ら誰を支持したか、最後まで明確にできなかった。

(注5) ジャワ史におけるこうしたジャゴの、文化・政治的媒介者としての役割についてはオンホッカムの興味深い議論がある。Onghokham, "The Jago in Colonial Java: Ambivalent Champion of the people," Andrew Turton; Shigeharu Tanabe 編, *History and Peasant Consciousness in South East Asia*, Senri Ethnological Studies No. 13, 大阪, National Museum of Ethnology, 1984年。また人間類型として、こうした人物のもつ独特な影響力とそのジャワ文化の文脈における意味については、関本照夫「サウイト事件の文化論的考察」(鈴木中正編『千年王国民衆運動の研究』東京 東京大学出版会 1982年)特に516~520ページ。

V 考察と結語

——派閥形成の諸要因——

1. ギアツの分析

以上の分析がしめすように、X村をめぐる選挙の作戦、影響力の拡大のための努力は、当社会が持つ各種の重層的な人間関係の累積を、行為者である諸候補者がいかに選挙戦術に応用していく

か、という技術の適用と言う観点から見る事ができる。ここで前述したギアツの議論(註1)との比較を試みてみよう。彼の調査したスンベルサリ(Sumbersari)という仮名の村落は、六つの区(dukuhan)に分かれている。モジョクト市から遠い二つの区(CおよびD)は、ギアツの分類によると村落部分に入り、しかもD区が明確なサントリ指向なのに対して、C区の方はアバンガンがかなり強いという対比があるとされる。さらに残りの4区(A, B, E, F)はモジョクト市に近いギアツの分類でいうと、カンポン(kampong, つまり都市の周辺部)とされ、これらは必ずしも明確にどの区がサントリかアバンガンかは分からないが、E区に「新プリアイ」とギアツが称するグループがあり一定程度力を持っているとされる。

これを候補者との関係でまとめると第8表のようになる。ギアツの分析の軸の一つはサントリ系か、アバンガン系か、ということであり、この点では筆者の調査したX村とは逆にアバンガン系の方に重要な分裂が見られる。このアバンガン系の分裂の基盤は、ギアツによると都市部(kampong)と村落部(desa)の対立であり、彼の言う新プリアイ(病院の執事)でありオランダ教育を受けたインテリの γ 対農民の δ といった対立に現われてくる。結局選挙はサントリ系の支持を得た α の勝利

第8表 スンベルサリ村における諸候補者と支持基盤

候補者	傾 向	政 党	支持基盤(区)
α	村落サントリ系リーダー カンポンのアバンガン	マシュミ系 PKI系 PNI [新プリアイ 的]	D
β (ϵ)			F
γ			E
δ (ζ)	村落のアバンガン	PNI系	C

(出所) 第1図と同じ。第6章から作成。

(注) 候補者の名前は α : Hasan, β : Paidjan, γ : Sutrisno, δ : Kemis, ϵ : Slamet, ζ : Senen である。支持基盤の区名は出所の155~161ページ参照。

におわるわけだが、その後に行なわれた書記(carik)選挙では、こうしたイデオロギー面よりも、都市(ϵ)か村落(ζ)かという対立が実際の票の決定要因になったとされている。

2. X村の事例との比較

こうしたギアツの分析を村のデータに照らし合わせてみると興味深い。まずX村の場合、このスンベルサリ村で見られたような新プリアイ対農民という対比に乏しい面がある。少なくともX村の候補者を見る限り、製糖工場の監督、小学校教師、工場勤め、宗務課役人といった範疇に入る者ばかりで、彼らはすでになんらかの形で村落の外部世界と接触があり、けっして村落レベルの純粋な代表者というわけではない。そもそもX村のあるクドゥス県周辺では、プリアイという言葉が日常的な範疇として用いられることは、少なくとも筆者の見聞する限りではない。こうした点では、ギアツの強調する都鄙対立はX村では必ずしも明確ではないが、例外としては、マルトノ派(第1区)の勢力基盤に、ややカルヤワン(役人、教師等、公務員の総称)が多く、特異な傾向を持つ地区としてイデオロギーよりはむしろある種の地域主義とも言える傾向を打ち出している点に、ギアツの分析する新プリアイの影響力があるカンポンとの共通点があるといえる。

だがX村のデータが示す限りでいうと、まず大まかな対立としての、NU系(サントリ)とPNI系(アバンガン)という分裂があり、スンベルサリ村における α と β の2人の二極分化と同様の傾向を示している。ただしX村においては、こうしたそれぞれの派閥をより細分化させる(特にNU)に至った原因は、スンベルサリ村でのような各区による傾向の差(PNI対PKI, 農村対都市)の現出というよりは、むしろNUという組織自体をめぐるも

ろもろの確執、権力争いやイデオロギー的傾向の対立、という諸要素の複雑な対立であり、それをギアツの示したような、比較的単純な社会的範疇に還元するのは困難である。こうした差異の一つの理由としては、特にX村の場合、旧体制下での非常に積極的な諸政党活動とくらべ、すでに新体制下の統制主義的状态への移行を経験しており、X村内派閥といってもPNIはすでに骨抜きにされて政府与党のゴルカルに吸収されていたわけであり、一方NUはというと、前述の「一元的忠誠」によって漸く内部の統制が乱れつつあった時期なのである。

3. 現在のX村——諸潮流の亀裂

このことは結局のところ、ギアツ時代の比較的単純なアリラン図式が描写した以上の複雑な亀裂が現在の農村の社会関係に反映していることを示している。現在におけるX村の政治状況は、形式上はゴルカルと、イスラム系野党であるPPPの均衡対立という図式で捉えることが可能であるが、詳細に検討してみると、村役場を構成するメンバー間の微妙な対立関係や、PPP内部の分裂という諸問題が存在している(注²)。村落保安委員会(Lembaga Ketahanan Masyarakat Desa, 略称 LKMD)(注³)のメンバーを見ても、スキジャン、ホノ、ハッサン、カシラン-アブドゥルの4派が入り乱れており、微妙な均衡をたもっている。NU系の村長(アブドゥル)と今やその体制に非常に批判的なハッサン(LKMDの第2議長)、PNI系の書記、旧村長時代の諸役人と現村長のポトーであった新役人たちが、一応ゴルカルということで村落行政組織という一つの箱のなかにいごこち悪く納まっている状態である。しかも、かつてNU正統派を標榜した現村長組が、政府役人として、旧来の正統派NUメンバーとしての活動を放棄し、NU系の宗

教講話や祈禱会に参加しなくなるにつれ、NUの中心はムストファ系に代表される強硬派が握るようになり、彼らのなかから、イスラム野党の村落代理人(Komisaris PPP)などが出て、事実上のNUの諸活動の実権を握るようになってきたわけである。これに危うい立場から対抗しているのが、ゴルカルに参加しつつも現村長組に批判的態度を強くとっているハッサンである。彼は現村長組がNUとの接触を完全に絶とうとしているのに対して、何とかして、NU強硬派と村落行政との距離を埋めようという努力をしているわけである。

4. 結語

ジャワ農村社会のように、諸人間関係の原則が単純ないくつかの原則に還元されえず、むしろこれらの諸関係が個人を中心として重層的に絡み合っている場合、ギアツの言うような文化的範疇や、あるいは他の論者の強調する経済関係等はあくまで関係決定のための部分的な構成要因にすぎない。X村の例のようにNUとPNIをめぐる区分法はある程度まで重要であったが、それらはそれぞれの派閥の諸々の諸要因(たとえば組織への関与度、そのイデオロギー性、血縁・地縁等の関係、職業など)によって細分化され、派閥の影響力を分断している。X村は特にあらゆる意味で急速な社会変化の波を直接的に被っており、こうしたことが社会的諸関係をますます見えにくいものとしている。こうした錯綜した諸関係のもつれた糸を開示してくれるのが、選挙に現われる政治的戦術としての人的交流関係なのである。

(注1) 以下スンベルサリ村の選挙の引用は、Geertz, *The Social History*……, 第6章。本論文中の諸人名との混乱を防ぐために人名は記号化した。ギアツの表記にしたがえば α =Hasan, β =Paidjan, γ =Sutrisno, δ =Kemis, ϵ =Slamet, ζ =Senen である。

(注2) こうした歴史的過程および現在の村におけるリーダーシップの構造については以下を参照。福島真人「イスラム・リーダーにおける信念と演技——ジャワ伝統派イスラム，意識とその変容——」(『季刊人類学』第17巻第3号 1986年9月掲載予定)。

(注3) LKMD は村長に直結する機関で，保安，教育，情報等の10部会に分かれ，政策の立案，予算の編成等の仕事を受け持つ。基本的に村落内の有識者の集まりであり，村落行政に重要な影響力をもつ。

〔付記〕 本論放は，インドネシア石油教育交流財団(Inpex)の御厚意による奨学金とインドネシア科学学術院(LIPI)の許可，およびガジャマダ大学農村地域研究センター(Pusat Studi Pedesaan dan Kawasan, Universitas Gadjah Mada)の後援を得て，筆者が1983年3月から85年3月までジャワの農村で行なった現地調査の結果にもとづくものである。筆者の滞在中諸々のアドバイスをしてくださった方々に深く感謝したい。

(東京大学大学院)